**女王国トライアングル**
川田　武
角川書店（新書）
（4／25刊・¥640）

菱和銀行のエリート社員香月は、突然、九州福岡支店に転勤を命じられる。上司の指示に疑いをもった香月は、ある日不思議な美女、麻也子と出会う。麻也子は、邪馬台国につながる、三角地帯（トライアングル）の秘密を話した。はるか古代、卑弥呼＝神功皇后から、英雄たちに〝力〟を与えつづけたものは、一体何だったのか……。

うーん。日本の裏側で、男たちを操る女。黒幕がいっぱいの伝奇小説群の中では、やや異質かもしれません。上司に目にものを見せてやるという、主人公のサラリーマン的復讐心は、麻也子の意志のままに、大企業融資の成功から、次期首相候補への接近まで、急テンポにふくれ上っていく。しかし、主人公の〝力〟は吸血鬼と同じ原理のため（！）、補給を怠ると、たちまち減衰してしまう。この設定、たしかにユニークではあるけれど、ちょっと説得力に乏しいのではないか。こんなに急激に力が衰えてしまうのなら、九州までそう簡単に戻れない古代の英雄は、とても〝力〟を維持できたと思えない。日本を操るというスケールの割に、主人公をはじめ、登場人物の個性が希薄なのも、災いしているような気がする。

（後）